

The ultimate analysis of some hierarchies under AD⁺

木原貴行¹

名古屋大学 大学院情報学研究科

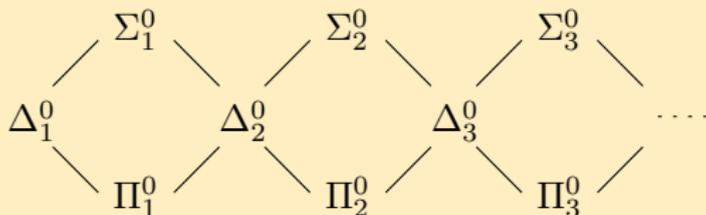
手形 L4 研究集会, 秋田大学

March 28, 2018

¹partially supported by JSPS KAKENHI Grant 17H06738, 15H03634, and the JSPS Core-to-Core Program (A. Advanced Research Networks)

- 名前: 木原 貴行
- 略歴:
 - 東北大学 理学部 数学科卒
 - 東北大学 大学院理学研究科 数学専攻 修了
 - JAIST 情報科学研究科 PD
 - カリフォルニア大学バークレー校 数学科 PD
 - 名古屋大学 情報学研究科 専任講師 (現職)
- 専門分野 (これまで論文を書いてきた分野)
 - 計算可能性理論, 計算可能解析学, アルゴリズム情報理論, 記述集合論, 逆数学など

算術的階層 (Kleene 1943)

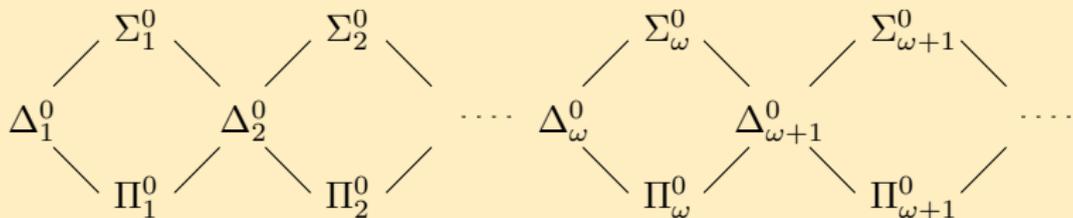


- 算術的集合: 一階算術の言語で定義可能な \mathbb{N} の部分集合
- Σ_n^0 : \exists から始まる高々 n 個の量化記号を用いて定義可能

$$\exists x_1 \forall x_2 \dots Q x_n \varphi(i, x_1, x_2, \dots, x_n)$$
- Π_n^0 : \forall から始まる高々 n 個の量化記号を用いて定義可能

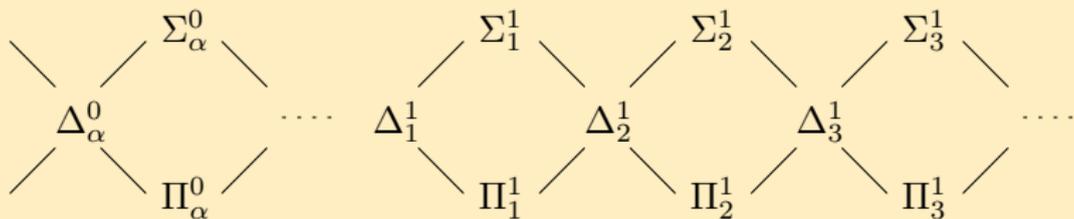
$$\forall x_1 \exists x_2 \dots Q x_n \varphi(i, x_1, x_2, \dots, x_n)$$
- $\Delta_n^0 = [\Sigma_n^0 \text{ かつ } \Pi_n^0]$.
- $\Delta_1^0 =$ 計算可能; $\Sigma_1^0 =$ RE; $\Pi_1^0 =$ co-RE.
- $\Delta_2^0 =$ 極限計算可能 = 停止問題を神託に用いて計算可能.

超算術的階層 (Davis, Mostowski; Kleene 1955)



- 超算術的階層: 算術的階層の無限論理 $\mathcal{L}_{\omega_1\omega}$ への拡張.
- Σ_α^0 : $\forall n \in \omega \varphi_n$ と定義可能. ここで φ は $\Sigma_{<\alpha}^0$ -論理式の計算可能列.
- Π_α^0 と Δ_α^0 も同様.
- 一階算術の真理値集合 $\text{Th}(\mathbb{N}) = \{\ulcorner \varphi \urcorner : \mathbb{N} \models \varphi\}$ は Δ_ω^0 .

解析的階層 (Davis, Mostowski; Kleene 1955)

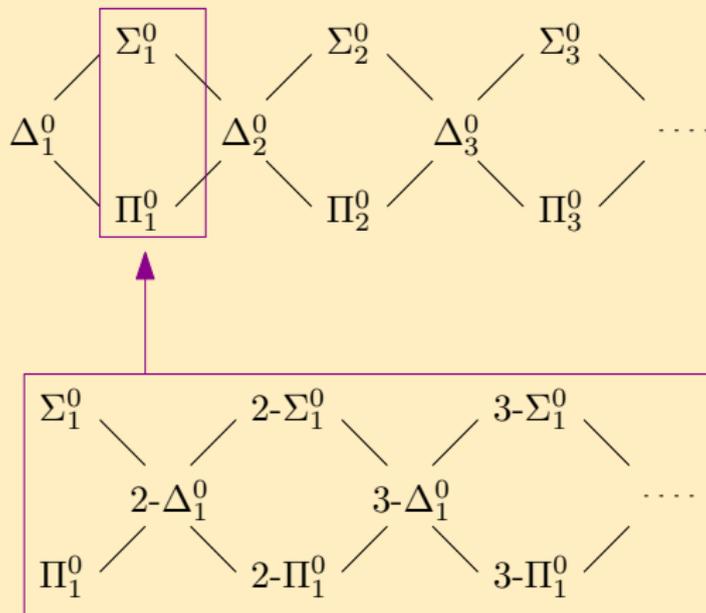


- 解析的集合: 二階算術 (解析) の言語で定義可能な \mathbb{N} の部分集合
- Σ_n^1 : \exists から始まる高々 n 個の集合量化記号を用いて定義可能 (数量化記号はいくらでも用いてよい)

$$\exists x_1 \forall x_2 \dots Q x_n \forall y_1 \exists y_2 \dots Q y_k \varphi(i, \bar{x}, \bar{y})$$

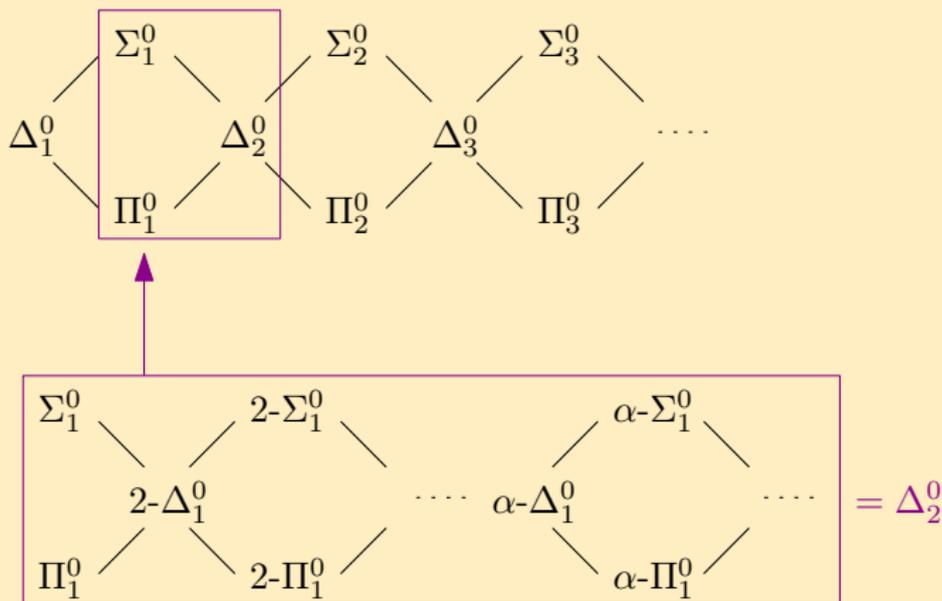
- Π_n^1 と Δ_n^1 も同様.
- $\Delta_1^1 =$ 超算術的 $= \bigcup_{\alpha < \omega_1^{CK}} \Sigma_\alpha^0$.

試行錯誤の階層 (Putnam 1965)



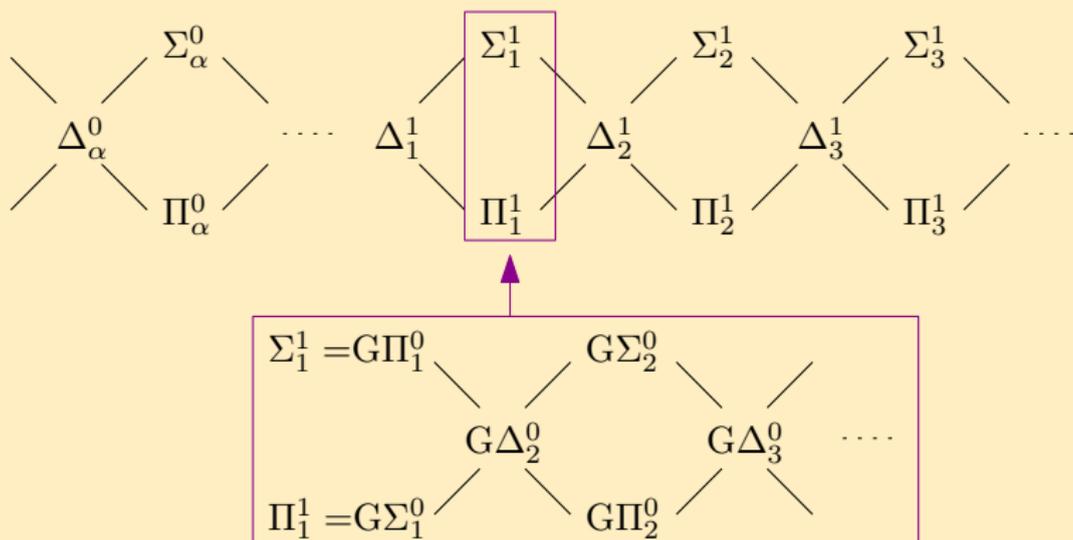
- $\Delta_2^0 =$ 極限計算可能; ($k \in \mathbf{A}$? Answer: n,n,y,y,y,n,y,y,y,y,... \rightarrow limit)
- $n-\Sigma_1^0$: 初期値 FALSE かつ高々 n 回の変心で極限計算可能
- E. M. Gold (1967): 言語の学習モデル (極限同定の理論)

試行錯誤の超限階層 (Ershov 1968)



- 超限回心変わりによる極限計算可能性の階層
- $\Delta_2^0 = \text{極限計算可能} = \bigcup_{\alpha < \omega_1^{\text{CK}}} \alpha-\Sigma_1^0$.

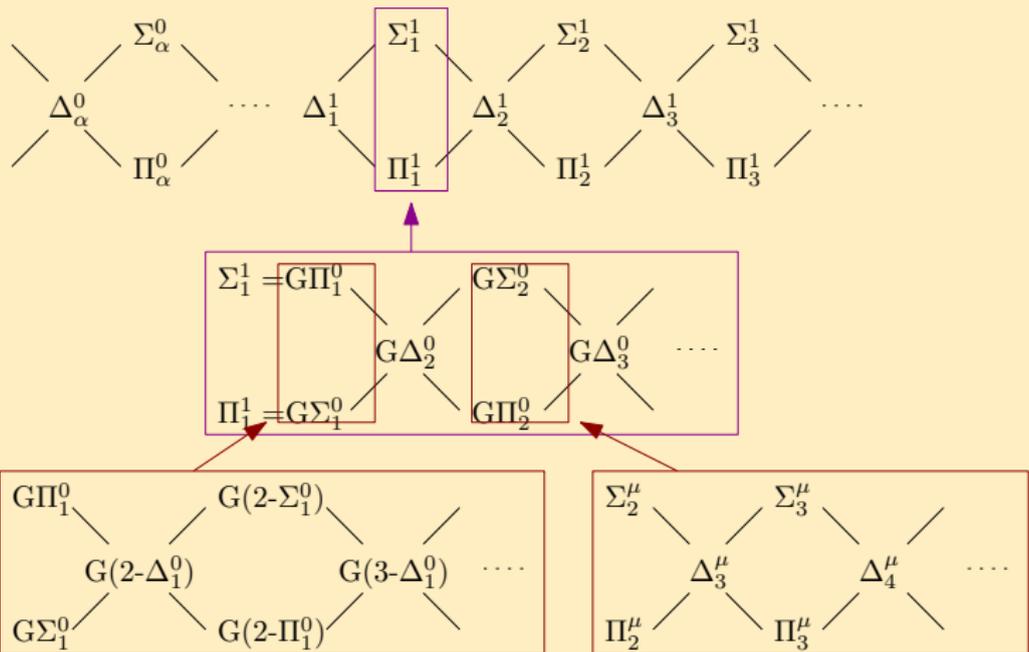
Δ_2^1 の内部には大量の階層が.....



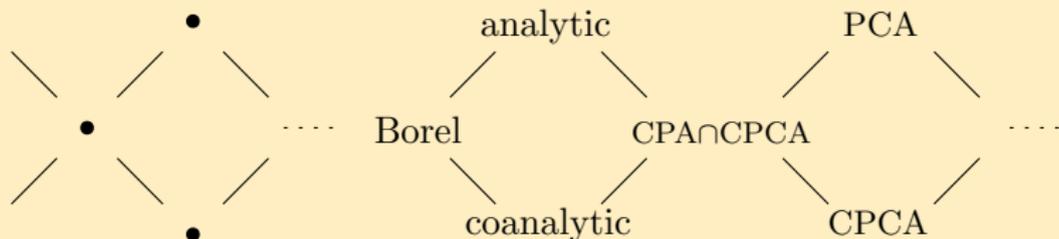
- ゲーム量子化: 無限長の量子子の入れ子の真偽は
ヨプレイヤーが必勝戦略が持つかで決まる .
- $\exists\Gamma$: Γ 論理式 φ に対する以下のゲームによって定義可能

$$\forall x_0 \exists y_1 \dots \forall x_n \exists y_n \dots \varphi(i, \bar{x}, \bar{y})$$

Δ_2^1 の内部には大量の階層が.....

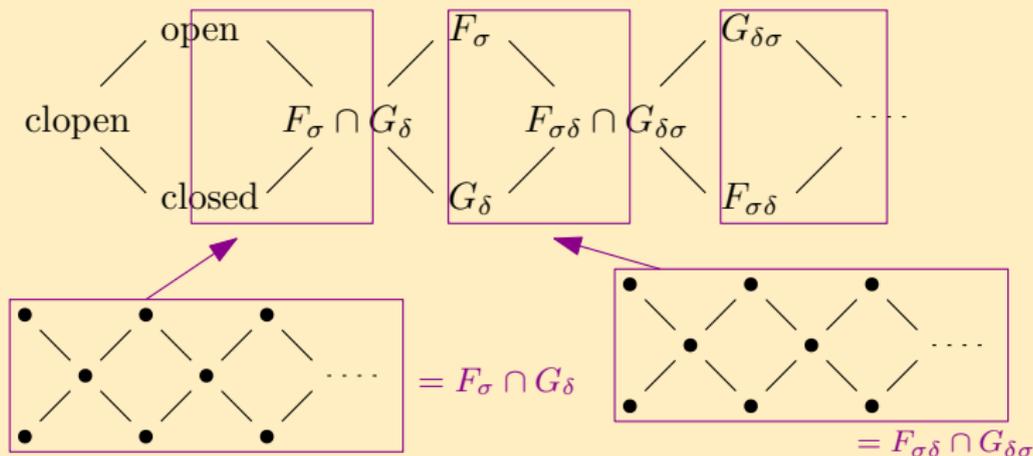


射影階層 (Luzin, Sierpinski, and others; 1920s)



- $C\Gamma$: Γ 集合の補集合として書ける集合
- $P\Gamma$: Γ 集合の射影として書ける集合
- 記述集合論の主戦場で, ZFC 独立命題の温床
- Luzin (1920s): "One does not know, and one will never know."

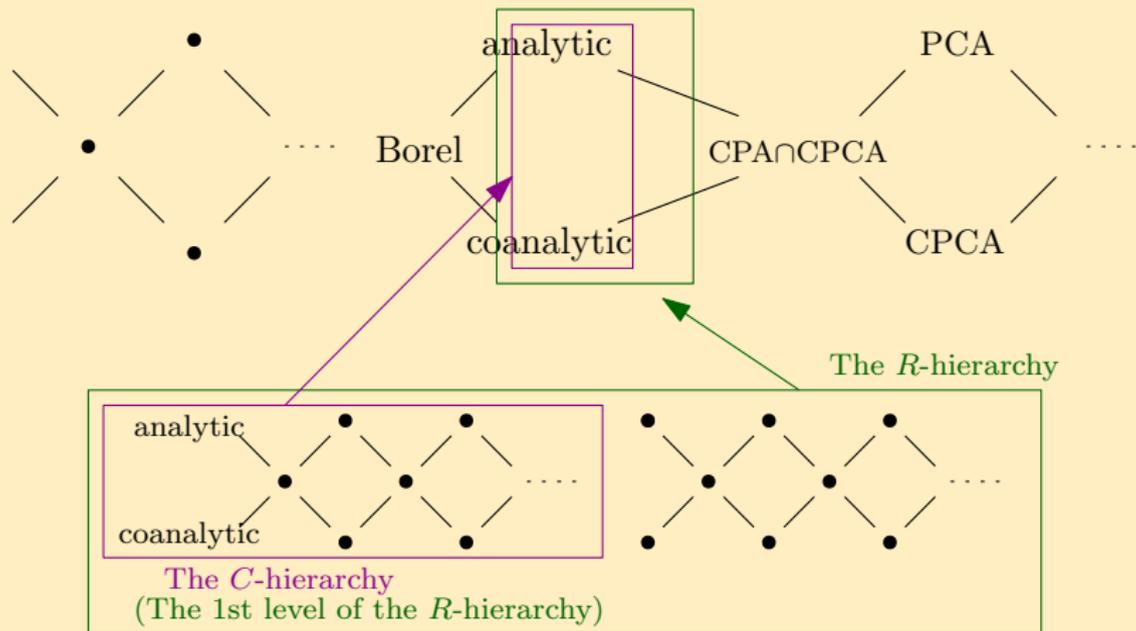
差の階層 (Hausdorff 1914 for $F_\sigma \cap G_\delta$; Kuratowski for general)



The Hausdorff difference hierarchy

- Γ を基とする差の階層の第 n 階: Γ 集合列 (A_i) を用いて $A_1 \setminus (A_2 \setminus (\dots (A_{n-1} \setminus A_n) \dots))$ と書ける集合
- $F_\sigma \cap G_\delta$ は開集合を基とする長さ ω_1 の差の階層から形成される .
- $F_{\sigma\delta} \cap G_{\delta\sigma}$ は F_σ 集合を基とする長さ ω_1 の差の階層から形成される

$CPA \cap CPCA$ の内部には大量の階層が.....; (1920s)



- 計算可能性理論と記述集合論には沢山の階層が存在する
- どちらの階層も問題の複雑性を測るのに用いられる

計算可能性理論における例

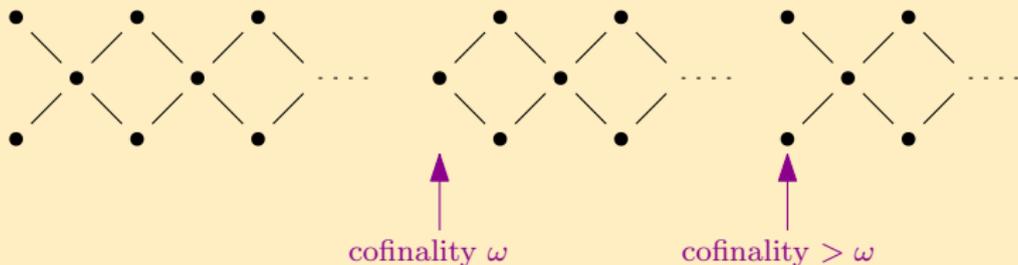
- 停止問題，群の語の問題，ディオファントス方程式の可解性判定 etc. は Σ_1^0 完全
- 有限表示群が torsion-free であるかどうかの判定は Π_2^0 完全
- 計算可能全順序が \mathbb{Q} を含むかどうかの判定は Π_1^1 完全

記述集合論における例

- 常微分方程式の初期値問題の解が一意かどうかの判定は $C(\mathbb{R}^2) \times \mathbb{R}^2$ で G_δ 完全
- 連続体の局所連結性判定は，連続体の超空間で $F_{\sigma\delta}$ 完全
- 連続体の単連結性判定は，2次元では **coanalytic** 完全，4次元以上では **CPCA** 完全

全ての (!) 記述集合論的階層は Wadge 階層によって精密化される .

Wadge 次数構造 (1970s)



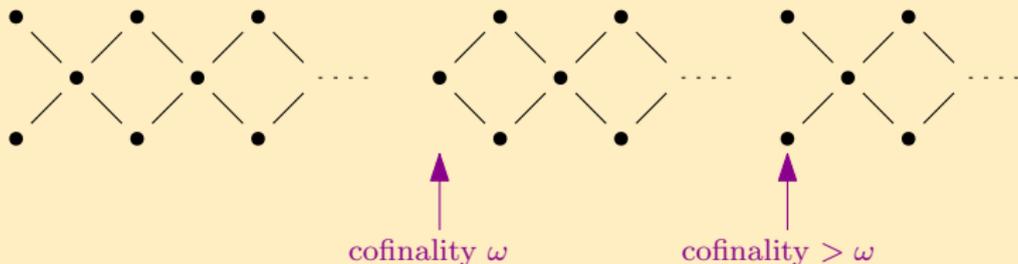
- **Wadge 次数**.....位相空間の部分集合の複雑性を測る指標 .
位相空間 X の部分集合 $A, B \subseteq X$ に対して ,

$$A \leq_w B \iff (\exists f : X \rightarrow X \text{ 連続}) A = f^{-1}[B].$$

- (AD) ω^ω の全ての部分集合は \leq_w によって半整列する .
(つまり , ω^ω の全ての部分集合は上図のように綺麗に並ぶ)

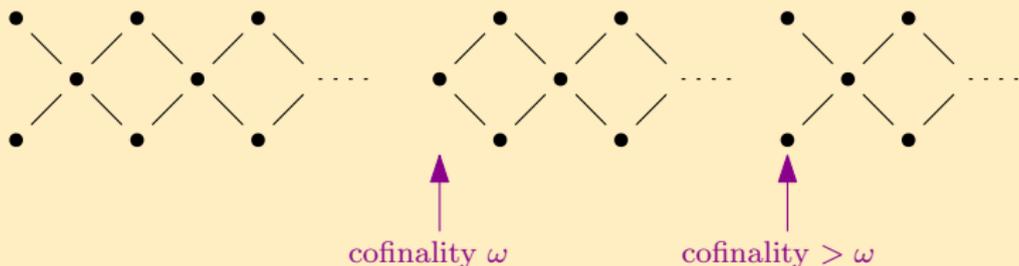
最近は無限オートマトンの研究などでも Wadge 次数は使われている

Wadge 階層 (1970s)



- $\text{rank}(\text{clopen}) = 1$; $\text{rank}(\text{open}) = \text{rank}(\text{closed}) = 2$
- $\text{rank} \approx 2^\alpha$ ($\alpha < \omega_1$): the α^{th} level of the difference hierarchy.
- $\text{rank}(F_\sigma) = \text{rank}(G_\delta) = \omega_1$.
- $\text{rank} = \omega_1^2$: the difference of two G_δ sets or the diff. of two F_σ sets
- $\text{rank} = \omega_1^\alpha$: the α^{th} level of the diff. hierarchy over F_σ
- $\text{rank}(F_{\sigma\delta}) = \text{rank}(G_{\delta\sigma}) = \omega_1^{\omega_1}$.
- $\text{rank} = \omega_1^{\omega_1^\alpha}$: the α^{th} level of the diff. hierarchy over F_σ

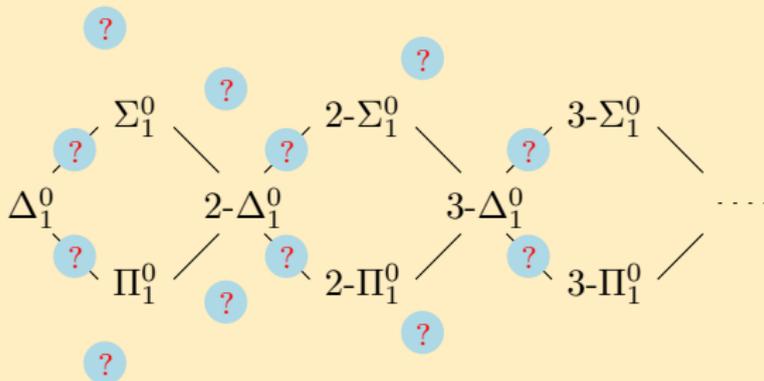
Wadge 階層 (1970s)



- Rank $\omega_1 \uparrow\uparrow n$ (the n^{th} level of the superexp hierarchy): the n -th level of the **Borel** hierarchy.
- Rank $\varepsilon_{\omega_1}[\omega_1]$: the ω_1^{th} fixed point of the exp. of base ω_1 : the ω -th level of the **Borel** hierarchy.
- The **Veblen hierarchy** of base ω_1 :
 $\phi_\alpha(\gamma)$: the γ^{th} ordinal closed under $+$, $\sup_{n \in \omega}$, and $(\phi_\beta)_{\beta < \alpha}$.
- Rank $\phi_\alpha(\mathbf{1})$ ($0 < \alpha < \omega_1$): The ω^α -th rank of the **Borel** hierarchy.
- $\text{rank}(\mathbf{analytic}) = \text{rank}(\mathbf{coanalytic}) = \sup_{\xi < \omega_1} \phi_\xi(\mathbf{1})$.

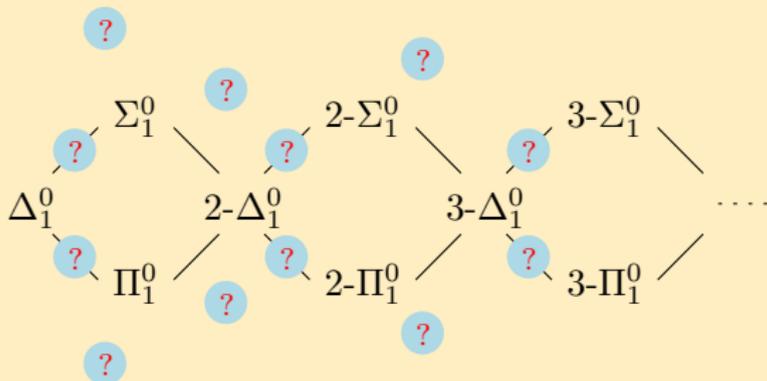
- 記述集合論における階層を統合する究極的な階層 (Wadge 階層) が存在し, ω^ω の部分集合の構造は美しく整然とする.
- 計算可能性理論における階層を統合する究極の階層は?

計算可能性理論の階層構造

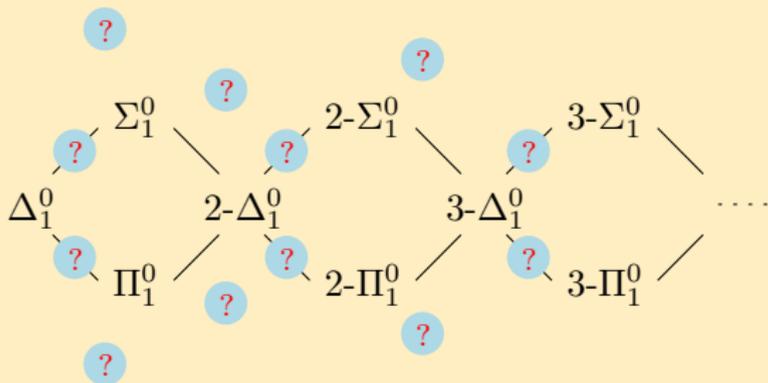


- Selivanov の微細階層の理論 (1983): 超算術的集合に対する, 一部だけ完璧 (上図参照) な究極な階層が存在する.
- 一方で, 他の至る所 (❓部分) に秩序は存在しない.

計算可能性理論の階層構造

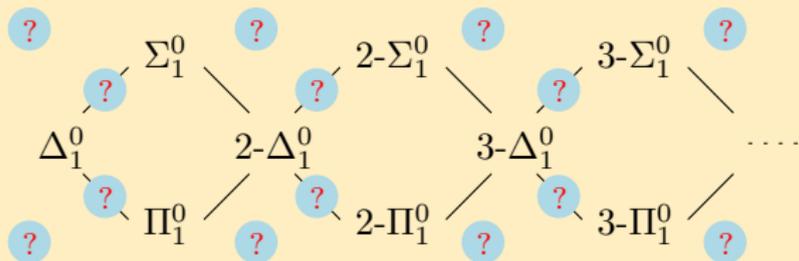


- Post の問題 (1944): 停止問題よりは簡単だが, 計算不可能である Σ_1 問題は存在するか?
(Σ_1^0 と Δ_1^0 の中間の?部分の難易度の決定問題は存在するか?)
- Friedberg-Muchnik (1957): **Yes**. 中間難度の Σ_1 決定問題が存在.
 - 実際, 各 ? 部分は, 任意の可算半順序が埋め込めるくらい巨大.
 - 決定問題の \leq_T も \leq_m も, その順序構造の一階理論は \mathbb{N} の二階理論と同じ複雑性を持つ.



- Post の問題 (1944): 停止問題よりは簡単だが, 計算不可能である Σ_1 問題は存在するか?
(Σ_1^0 と Δ_1^0 の中間の $\textcircled{?}$ 部分の難易度の決定問題は存在するか?)
- Friedberg-Muchnik (1957): **Yes**. 中間難度の Σ_1 決定問題が存在.
-が, それらは極めて技巧的で人工的な Σ_1 問題である
- Post の問題の「自然」な解は存在するか?
(Σ_1 -完全でも Δ_1 でもない自然な Σ_1 問題は存在するか?)
- 「自然」とは何か? 「自然」の数学的定義とは?

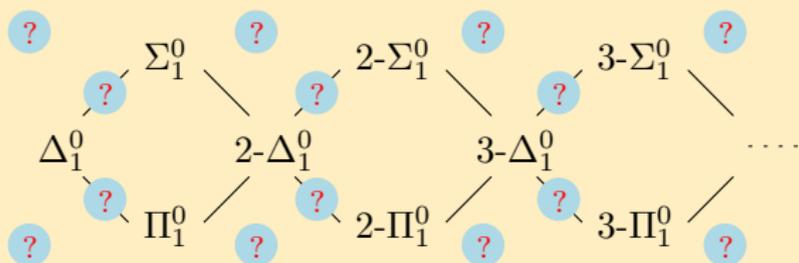
計算可能性理論の階層構造



Big Conjecture: Σ_1^0 contains no **natural** problems

- (60年代) **自然**な決定問題 P は、**相対化可能**であり、同じ強さの神託 X, Y に対する相対化 P^X と P^Y の難易度が等しい。
- (マーティン予想; Victoria Delfino 第5懸賞問題)
(ZF+AD+DC) 自然な決定問題のチューリング次数は整列し、後続はチューリングジャンプによって与えられる。
- V.D. 第1~5問題 (Cabal '76-77) の中では最後の未解決問題。
- 計算可能性理論の最大の未解決問題の1つ
- 第6~12問題 (Cabal '81-85) と第13~14問題 (90s) も含めると、第5 (Martin) と第14問題 (Woodin; $AD \stackrel{?}{=} AD^+$) のみが未解決。

計算可能性理論の階層構造



Theorem: Σ_1^0 contains no **very natural** problems!

Theorem (K. and Montalbán, to appear in Trans. Amer. Math. Soc.)

(AD) 「とても自然」な決定問題の多対一次数は Wadge 次数に完全に一致する.

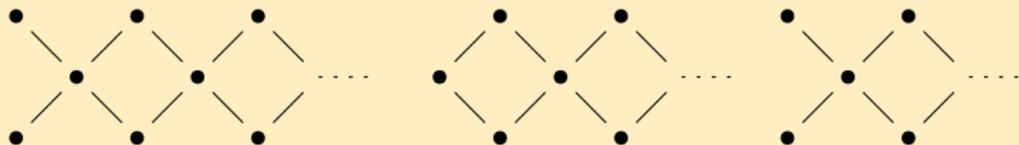
「とても自然」な決定問題 P は, 相対化可能であり, 同じ強さの神託 X, Y に対する相対化 P^X と P^Y の難易度が等しい:

$$X \equiv_T Y \implies P^X \equiv_m P^Y.$$

更に, $X \equiv_T Y$ の witness から $P^X \equiv_m P^Y$ の witness を返す関数が存在.

「とても自然」な決定問題の多対一次数は Wadge 次数に完全に一致

とても自然な決定問題の多対一次数構造



「とても自然」な決定問題 P は，相対化可能であり，次が成り立つ：

$$X \equiv_T Y \implies P^X \equiv_m P^Y.$$

更に， $X \equiv_T Y$ の witness から $P^X \equiv_m P^Y$ の witness を返す関数が存在.

- Wadge 次数.....位相空間の部分集合の複雑性を測る指標
- 「とても自然」な決定問題について，
「計算論的な難易度」＝「位相的複雑性」
- 「開」と「開かつ閉」の間は存在しないので、「 Σ_1 -完全」と「計算可能」の間難度の「とても自然」な決定問題は存在しない．
- この「中間難度の非存在」が全てのレベルで成立する．

(AD⁺) \mathcal{Q} を better-quasi-order (BQO) とする . このとき ,

「とても自然」な \mathcal{Q} 値問題の多対一次数は ,
 \mathcal{Q} 値関数の Wadge 度数に完全に一致する .

- (Kruskal 他) **WQO** (well-quasi-order) の理論
- (Nash-Williams 1965) **BQO** (better-quasi-order) の導入
- (Block 2015) **vsBQO** (very strong better-quasi-order):

$$(\forall f : [\omega]^\omega \rightarrow \mathcal{Q})(\exists X \in [\omega]^\omega) f(X) \leq_{\mathcal{Q}} f(X^-).$$

where X^- is the shift of X , that is, $X^- = X \setminus \{\min X\}$.

- **WO** \implies **vsBQO** \implies **BQO** \implies **WQO**.
- 任意の有限前順序は **BQO**.
- (Woodin) **AD⁺** \vdash **Axiom of Ramsey**:
 $(\forall A \subseteq [\omega]^\omega)(\exists X \in [\omega]^\omega) ([X]^\omega \subseteq A \text{ or } [X]^\omega \cap A = \emptyset)$.
- (K. & Montalbán) **Axiom of Ramsey** の下で **BQO** = **vsBQO**.
(AR より , f は Ellentuck 位相の下でベールの性質を持つので)

Theorem (K. and Montalbán, to appear in Trans. Amer. Math. Soc.)

(AD⁺) \mathcal{Q} を better-quasi-order (BQO) とする . このとき ,

「とても自然」な \mathcal{Q} 値問題の多対一次数は ,
 \mathcal{Q} 値関数の Wadge 次数に完全に一致する .

BQO は , ポレル関数の Wadge 次数構造の理解に極めて重要 (後述)

- 関数 $f, g : \omega^\omega \rightarrow \mathcal{Q}$ について ,

$$f \leq_w g \iff (\exists \theta \text{ 連続})(\forall x \in \omega^\omega) f(x) \leq_{\mathcal{Q}} g \circ \theta(x).$$

- van Engelen-Miller-Steel (1987):
 \mathcal{Q} が BQO \implies \mathcal{Q} -値ポレル関数の Wadge 次数も BQO.
- Block (2015): AD を仮定する .
 \mathcal{Q} が vsBQO \implies \mathcal{Q} -値関数の Wadge 次数も vsBQO.

- Q -ラベル付き木とは, 木 (T, \leq_T) とラベル $\nu_T : T \rightarrow Q$ の対
- Q -ラベル付き木 S, T の間の準同型とは, 関数 $h : S \rightarrow T$ で,

$$\sigma \leq_S \tau \implies h(\sigma) \leq_T h(\tau).$$

$$\nu_S(\sigma) \leq_Q \nu_T(h(\sigma)).$$
- $S \trianglelefteq T \iff$ 準同型 $h : S \rightarrow T$ が存在する .
- $\text{Tree}(Q)$: Q -ラベル付き可算整礎木全体
- ${}^\sqcup\text{Tree}(Q)$: $\text{Tree}(Q)$ の可算和として書ける森全体
- $B_\alpha(Q)$: Q -値ベール α 級関数全体

定理 (Selivanov 2004; 2017)

Q を有限離散順序とする .

$$(\mathbf{B}_1(Q), \leq_w) \simeq ({}^\sqcup\text{Tree}(Q), \trianglelefteq)$$

$$(\mathbf{B}_2(Q), \leq_w) \simeq ({}^\sqcup\text{Tree}(\text{Tree}(Q)), \trianglelefteq)$$

Selivanov (2016) では, これの任意のベール有限級への一般化が証明なしでアウンスされている . しかし, Selivanov (2017) では曖昧な記述になっており, 本当に証明されているのか不明.

Theorem (K. and Montalbán)

\mathcal{Q} を BQO とする .

$$\begin{aligned}(\mathbf{B}_1(\mathcal{Q}), \leq_W) &\simeq (\sqcup\text{Tree}(\mathcal{Q}), \trianglelefteq) \\(\mathbf{B}_2(\mathcal{Q}), \leq_W) &\simeq (\sqcup\text{Tree}(\text{Tree}(\mathcal{Q})), \trianglelefteq) \\(\mathbf{B}_3(\mathcal{Q}), \leq_W) &\simeq (\sqcup\text{Tree}(\text{Tree}(\text{Tree}(\mathcal{Q}))), \trianglelefteq) \\(\mathbf{B}_4(\mathcal{Q}), \leq_W) &\simeq (\sqcup\text{Tree}(\text{Tree}(\text{Tree}(\text{Tree}(\mathcal{Q})))) , \trianglelefteq) \\&\dots\end{aligned}$$

実際 , 任意の可算順序数 α について , 以下が成立する .

$$(\mathbf{B}_\alpha(\mathcal{Q}), \leq_W) \simeq (\sqcup\text{Tree}^\alpha(\mathcal{Q}), \trianglelefteq)$$

特に , 以下が成立する .

$$(\mathbf{Borel}(\mathcal{Q}), \leq_W) \simeq (\bigcup_{\alpha < \omega_1} \sqcup\text{Tree}^\alpha(\mathcal{Q}), \trianglelefteq)$$

証明には , 計算可能性理論におけるチューリング次数の理論に関する Friedberg's jump inversion theorem を用いる .

- なぜ **BQO** が重要だったか？
- (EMS 87) **Q** が **BQO** \implies (**Borel(Q)**, \leq_w) も **BQO**.
- よって，帰納的に **Tree $^\alpha$ (Q)** が **BQO** となることも示せる．
- これより，たとえば以下のことが分かる．

$$\begin{aligned}
 B_n(\mathbf{Q}) &\simeq B_{n-1}(\text{Tree}(\mathbf{Q})) \simeq B_{n-2}(\text{Tree}^2(\mathbf{Q})) \simeq \dots \\
 &\simeq B_{n-k}(\text{Tree}^k(\mathbf{Q})) \simeq \dots \simeq B_1(\text{Tree}^{n-1}(\mathbf{Q})) \simeq \sqcup \text{Tree}^n(\mathbf{Q}).
 \end{aligned}$$

- この観測は証明を大幅に簡略化する．

- **Q = 2** の場合，(**B $_\alpha$ (2)**, \leq_w) の構造は，Wadge, Duparc らによって調べられている．
- Duparc の論文は 2000 年頃に公表されたが，人類には理解不可能な証明が書かれており，いまだ受理されていない．
- ということで，**Q = 2** のときですら，常人に理解可能な論文が存在しなかった．
- 我々の証明は，**Q = 2** に制限しても，既知の証明(?) の大幅な簡易化を与えており，本結果の副産物として，**Q = 2** の場合の「頑張れば理解できる証明」が与えられる．

Corollary (K. and Montalbán)

\mathcal{Q} を BQO とし, \mathbf{VN} を「とても自然」な問題全体とする.

$$(\Delta_2^0(\mathcal{Q}) \cap \mathbf{VN}, \leq_m) \simeq (\sqcup \text{Tree}(\mathcal{Q}), \trianglelefteq)$$

$$(\Delta_3^0(\mathcal{Q}) \cap \mathbf{VN}, \leq_m) \simeq (\sqcup \text{Tree}(\text{Tree}(\mathcal{Q})), \trianglelefteq)$$

$$(\Delta_4^0(\mathcal{Q}) \cap \mathbf{VN}, \leq_m) \simeq (\sqcup \text{Tree}(\text{Tree}(\text{Tree}(\mathcal{Q}))), \trianglelefteq)$$

$$(\Delta_5^0(\mathcal{Q}) \cap \mathbf{VN}, \leq_m) \simeq (\sqcup \text{Tree}(\text{Tree}(\text{Tree}(\text{Tree}(\mathcal{Q})))), \trianglelefteq)$$

...

実際, 任意の可算順序数 α について, 以下が成立する.

$$(\Delta_{1+\alpha}^0(\mathcal{Q}) \cap \mathbf{VN}, \leq_m) \simeq (\sqcup \text{Tree}^\alpha(\mathcal{Q}), \trianglelefteq)$$

特に, 以下が成立する.

$$(\Delta_1^1(\mathcal{Q}) \cap \mathbf{VN}, \leq_m) \simeq (\bigcup_{\alpha < \omega_1} \sqcup \text{Tree}^\alpha(\mathcal{Q}), \trianglelefteq)$$

-  T. Kihara and A. Montalbán, [The uniform Martin's conjecture for many-one degrees](#), to appear in Transactions of the American Mathematical Society ([arXiv:1608.05065](#)).
-  T. Kihara and A. Montalbán, [On the structure of the Wadge degrees of BQO-valued Borel functions](#), submitted ([arXiv:1705.07802](#)).